

小学校図画工作科における体系的な版画教材の研究
開発：福井大学・福井県教育研究所の取組

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湊, 七雄, 牧野, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/9938

小学校図画工作科における体系的な版画教材の研究開発

— 福井大学・福井県教育研究所の取組 —

福井大学教育地域科学部 湊 七 雄
福井県教育研究所 牧 野 浩 之

子どもの主体性と創造性を育むことのできる版画授業の実現を目指し、福井大学教育地域科学部湊研究室と福井県教育研究所図画工作担当の共同研究として、小学生を主たる対象とした版画教材の開発に取り組んだ。

技術指導に偏りやすい版画教材の傾向を踏まえ、低学年向けに開発した「いろいろペッタン」は、版画の導入・基礎教育と位置づけた造形遊びの教材である。様々な幾何学形体や不定形に切断し持ち手をつけた大小の木片や身の回りの日用品をスタンプにし紙に捺す事で、絵を構想したり偶然の模様や形などから発想したりする力の育成が可能となった。中高学年向けの教材「表現を楽しむ木版画」は、下描きの過程を簡略化させることで、彫りと刷りの過程を充実させることが可能となった。

教材開発は子どもの為だけでなく、版画教材の本質やおもしろさを教師が発見できる魅力も兼ね備えている。大学における技法研究・教材開発の実績と教育研究所における現職教員研修のための教材開発の実績を統合することで、教師教育教材としての発展性にも期待できることが分かった。

キーワード：版画教育、図画工作、通信型研修、教員研修、教師教育

はじめに

小学生の頃に、誰でも一度は木版画を制作した体験を持っているのではないだろうか。そのときの印象はどのようなものだったであろうか。筆者らの小学生時代を振り返ると、白黒や左右が反転する手順を理解し、転写などの工程を経て刷る作業が複雑で大変だったことを覚えている。それは刷り上がった時の感動よりも強く残っており、黒いインクで手を汚しながらも、紙だけは汚さないように刷り上げるだけで精一杯だった。表現することが楽しかったのか、でき上がった作品が良かったのかどうかほとんど記憶にない。多くの大人はこのような印象と共に版画を記憶しているのではないか。

では、今日の子どもにはどのように受け取られているのだろうか。今なお同じような思いを持つ子どもを産みだし続けてはいないだろうか。

福井県の小学校図画工作科では必ず版画の指導が入って来るが、図工の専科教員を置かない福井県では、美術を専門としない教諭が実技指導にあたるケースがほとんどである。しかし、教師らが版画の教育内容や指導法について学ぶ機会は限られており、かねてより研修機会の増加や指導に関するサポート体制が求められていた。

そこで、版画指導を担当する小学校教師らのニーズをふまえ、福井大学教育地域科学部湊研究室と福井県教育研究所図画工作担当の共同研究として、小学生を主たる対象とした版画教材の研究開発に取り組んだ。

本稿は、主に平成25年度から平成27年度までの3年間

に取り組んだ版画の教育内容研究と教材開発の過程とその成果を報告するものである。

1. 版画教育の現状

●初等教育における版画教育

版画は版の仕組みにより、つぎの4つの版種に大別できる。

- ① 凸版画（主に木版画、コラグラフ）
- ② 凹版画（主に銅版画）
- ③ 平版画（リトグラフ）
- ④ 孔版画（シルクスクリーン）

これらの中で、わが国の小学校においては専ら木版画やコラグラフ（紙版画）などの凸版画が教材として採り上げられてきた。木版画に代表される凸版画の原理は至って単純であるが、それ故に作品として仕上げるには熟練の技が求められる。歴史的には、下絵を作成する「絵師」と、版を彫る「彫師」、摺りを担当する「摺師」の協業となっていたほどである。しかし明治末期から大正初期にかけて、木版画の複製手段としての側面ばかりがクローズアップされる傾向を正し、創作の魅力を再確認しようとする「創作版画運動」が起こった。それが契機となり作画・彫り、摺りの3つのプロセスを一人でこなすスタイルが定着した。以降、日本の教育現場においても、創作版画の方法や理念を基にした教材が発展した。

一方、版への描画がそのまま版画になる平版画や、絵が反転しないシルクスクリーンなど、子どもにとっては

製版が簡単であるにも関わらず教材として採り上げられなかった背景には、「版を刻む」というプロセスに大きな意味を見出してきたからだと言えよう。

私たちの生活は「版」や「型」に囲まれている。新聞、本、雑誌、電気製品、食器、洋服など多岐にわたる。むしろ、「版」や「型」が用いられていないモノを探す方が難しい程である。版画の大きな特性の一つに反復性をあげることができる。自分が想定する図像が版を介して様々に展開するプロセスを経験することにより、子どもたちは感性を働かせながら、一品制作ではない面白さを味わう事ができる。また、版を介した表現は偶然性を取り入れることであり、人がコントロールしきれないものがあること、人為を越えた価値に気付く機会が与えられるということも押さえておきたい。

●技術指導への偏重傾向

版画本来の創作的な魅力を取り戻そうとした「創作版画」であるが、学校教育においては、どうしても職人的な技能が求められる彫りのプロセスの指導が中心となる傾向がある。彫刻刀を使った木版画は、小学校中学年から採り上げられる事が多いが、子どもたちにとっては全く新しい道具である彫刻刀について、制作を通してその特性を知り、さらに丸刀・三角刀・平刀などを使い分けるには様々な困難が伴う。そのため、道具の扱いをはじめ、彫り方や明暗の表現など、どうしても技術指導の比重が大きくなりがちである。

その結果、版画指導を担当する教師の多くは、制作に対するモチベーションが低下し、表現への興味が増幅する感覚を体験できない子どもの姿を目の当たりにすることになる。

●「発注型授業」について

技術指導が中心になることで、必然的に子どもたちにとっての配慮すべき決まり事が増える。制作に取りかかる以前の段階で、ある種のストレスを抱えてしまい、「創作」が成立しないことも多い。

教師らは下絵作りと製版（彫り）に時間がかかる事を経験的に知っている事もあり、最初に参考作品を見せて教師側で準備した題材を与える（＝発注する）ケースが多々見受けられる。しかし、こうしたアプローチにより、子どもたちの豊かな創造性を引き出すことは困難であると考えられる。

一方で「発注型」で進めることにより、効率的・計画的に制作を進めやすいという側面もある。しかし、版画教材で育成されるべき資質や能力について整理をするならば、必ずしも望ましい指導だとは言えない。

●福井県における版画教育の特徴

福井県の学校教育で行われている版画は、白い紙に黒いインクで刷られていることが多い。白黒の表現はコントラストが強く印象的であるため、多くの教師が必須であると考えているようである。そして、一版白黒版画という形態はそのまま、技法の難度のみを児童の発達段階に合わせる形で実践されている。小学校低学年はスチロールやボール紙を使い、中学年から彫刻刀を購入すると共に、シナベニアの合板を使って木版画を実践している。ここで行われている木版画は、自由画のように動物や人物を子どもらしく素朴に表現したものであり、棟方志功のような表現をひとつの理想像としたものなのではないだろうか。

福井県には県版画コンクール¹があり、2学期中盤から版画指導に入る学校が多い。こうしたコンクールは美術教育を後押しするとともに、子どもへの意識付けにもなり、たいへん貴重な事業である。しかし、当然ながらそこでは作品の質で賞が決定される。版画の実践に対してコンクールによる動機づけが強ければ強いほど、子どもに良い作品をつくらせたい、完成した作品をつくらせたいという教師の思いが強くなり、作品主義的な実践が行われやすくなる。

子どもが感性を働かせて自然や対象から豊かに感じ取り、感じ取ったものから発想・構想し表現するような実践が行われていればよいが、子どもの思いよりも教師の思いを優先し、傾向と対策のように描く対象を限定したり、技術偏重の指導が行われたりすることは避けなければならない。つまり、「版に表す表現」に関して、児童の発達段階に合わせ系統的な指導をすることにより、発想や構想の能力を育成すると共に、児童がどのような資質や能力を身につけたかに重きを置いた教育としなければならない。

2. 教育内容研究

●育成すべき資質・能力

図画工作科の目標は、言うまでもなく「表現や鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」² ことである。図画工作科で育成すべき資質・能力はもちろん、教育観がコンテンツベースからコンピテンシーベースへと転換してきている現在、版画教育における学習ポイントは版画技法の伝達ではない。よって、版画実践が技法の理解に多くの時間を費やしているとすれば、改善の余地がある。

「版に表す表現」つまり、「版を介した表現」の面白さは材料の質感により偶然できる表現の面白さである。

それは、子どもにとって人がコントロール仕切れないも

¹ 福井県内在住の小中学生、高校生を対象とした大規模なコンクールで福井新聞社が主催する。例年多数の応募があり、平成23年度の第33回を例にあげると、コンクールには県内の小中高校と特別支援学校269校から4万7166点の応募があり、2606点が入賞した。（福井新聞・2011年2月18日）

² <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/zu.htm>

のとの出会いであり、自然性との出会いであるといえる。様々な材料と対話し、組み合わせで擦すことにより、手で絵を描くこととは違う技能を育成することにつながる。こうした経験は、子どもの感性を働かせることになり、発想や構想する力を育成することにつながるのではない。このように「版画」を従来の枠組みから距離を置いて捉え直し、「材料を介した表現」というようにシンプルに捉えることで、教育として可能性を広げることができる。と考える。

●育成型授業

学習指導要領には、「児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること」とある。

版画のおもしろさ、魅力、作り出す喜びを味わう事ができる授業の実現には、子どもの創造性や独創性、作品制作への意欲をいかに発展させるかが鍵となる。これは教師らに共通する関心事であるが、では具体的にどのような指導が望まれるのだろうか。

アメリカ・ロチェスター工科大学芸術学部教授でノントキシック版画技法の第一人者として知られたキース・ハワード (Howard, 1993) は、理想的な版画授業として「育成型授業」を提唱している。

子どもの創造性、意欲、独創的な考えの発展など、育成型授業を取り入れている教師は常に、子どもの芸術的な発達を第一に授業をデザインし、子ども一人一人の発達段階や個性を尊重しているとされる。

「育成型授業」の環境づくりとして、①友好的な雰囲気、②寛大な眼差し、③押しつけでない、④協力的である、などの要素を求めている。

ハワードは、美術系高等教育機関においてスタンダードとなっている旧来の授業形態を5つのタイプに分け、目指すべきでない事例として紹介している。

- ① ジャングル型授業
- ② クローン型授業
- ③ 全能型授業
- ④ 放置型授業
- ⑤ カリキュラム束縛型授業

それぞれの特徴について要約は次のとおりである。

- ① ジャングル型授業は、ジャングルでのサバイバル生活に例えられる。実社会でアーティストとして生きていくために必要となるサバイバル術を習得させるため、一方的に無理難題を与えるやり方で、ごく一部の子どもの才能が開花することがあるが、一方で多くの美術嫌いを生む危険性を孕んでいる。
- ② クローン型授業は、参考作品などを先に見せるなどして、お手本に忠実な作品（クローン）を制作させるスタイルである。
- ③ 全能型授業は、指導に自信を持つモチベーションの

高い教師に見受けられるスタイルである。全能者の如く、子どもを自在にコントロールできるとの考えの下、周到に準備されたステップバイステップの授業運営により、子どもに失敗を経験させることなく作品完成まで導こうとする。

- ④ 放置型授業は、子どもたちの創作プロセスに全く干渉せず、子ども達の自主性に任せておく。「美術」を二の次と考える教師に見られる傾向で、学校教育の中に美術が教科として置かれている意味を意識化出来てない場合が多い。
- ⑤ カリキュラム束縛型授業は、授業計画に盛り込まれた授業目標や内容の一字一句に縛られてしまい、「生きた授業」が実現されないケースを指す。また、幾年にも渡り同様の授業を繰り返し、それが最良の方法だと信じ、省察を加えることのない授業もこのタイプに分類される。

以上、アーティスト養成を目的とした美術系大学の事例として紹介されているものであり、小学校の図画工作の授業に当てはめて論じるには無理があるが、教師一人一人が「育成型授業」について考えるにあたり参考にできるであろう。

●「閉じた題材」から「開かれた題材」へ

「何を表現するか」という問題は常に難しく、曖昧になりがちである。しかし、成長とともに材料からの発想を超えて、主題を生成し思いを持って表現することが必要になってくる。題材として採り上げられる頻度の高い「運動会の楽しい思い出」や「遠足の思い出」などといった「思い出」をもとにした題材がある。一見すると制作の方向性が明快であるように思われるが、実体験として子どもたちの身体に刻まれている記憶を客観的に再構成し絵に仕上げるためには、極めて高度な表現を求める結果となる。また、「木を描こう」「花を描こう」というように描くものを限定した題材ではなく、「生命力を描こう」とすると描く対象を限定せず、表現の視点も明確になる。こうした題材設定が重要であることはよく言われることである。こうした「開かれた題材」に求められる要素は、作品制作の枠組みを示しつつも、子どものイメージを固定しないこと、創作意欲が湧きやすい題材とすることである。

低学年の「いろいろペッタン」は造形遊びから版画につながる題材であり、子どもたちがスタンプを自由に加工することも想定している。また、一枚の版木であってもそのまま彫るのではなく、切断して構成する方法も考えられる。一枚の版画作品を制作するには「開かれた題材」を工夫して設定する必要があるが、「版を介した表現」を楽しむことを主眼とすれば、版画そのものが開かれた表現方法となってくることも考えられる。

●主体的な学びの創出

「開かれた題材」にするということは、子どもたちに選択肢を与えるということである。何を使ってどう表現するか、どのような表現が最適かを児童自身が決定できるようにすることにより、主体性を育てていく。開かれた題材にはそうした要素があることも意識する必要がある。様々なスタンプや版を捺し、表現を試行錯誤することで、児童自身が表現したいことを見つけ、主題生成につなげることができる。子どもが手で直接絵を描かなくても版を介することにより絵ができる。その絵は作者から適度に距離を保ち、手で描いた絵よりも客観的に見やすいのではないだろうか。出来上がったイメージを見て、どう感じるかなど鑑賞もしやすい。このように版画は、表現や鑑賞をしやすくする表現方法だといえるのではないだろうか。

●発達段階に合わせた体系的指導の必要性

筆者（牧野）が小学校で「子どもの絵の見方」の訪問研修を行った際などによく受ける質問に、「子どもが描き残した余白に何かを描かせる指導をすべきか」というものがある。子どもはできたと思って教師にとっては不完全に見えるのであろう。そうした教師の気持ちは理解できるが、子どもの作品に明確な思いや意図があれば、それを優先すべきである。表現としてうまくいってなくても、子どもの思いを飛び越えた基準で判断されるのは良いこととは言えない。また、筆者の経験から判断して、こうした事後の個別指導で子どもの絵がよくなることは稀である。

こうしたことから図画工作に必要なのは、もっと早い段階から、子どもが試行錯誤しながら表現し、どう描くとう見えるかなどの表現や鑑賞の経験を繰り返すことではないか。そして、「こう表したいから、こう描く」と言える子どもを育てることだと考える。それはつまり、子どもの発達段階に合わせ、資質や能力を段階的に育成できる系統的な指導が必要であることを意味している。図画工作の学びは題材設定や環境設定によるところが大きいことを意識すると同時に、体系的な学びであるという認識を持つことがたいへん重要である。

3. 教材開発

●発達段階に合わせた題材（低学年）

福井県の小学校低学年における一般的な版画題材は、紙版画やスチロール版画である。限られた時間の中で行われる題材は、制作手順を追って後戻りのない制作が行われていく。こうした一方向的な制作を繰り返していくと、紙のどこに、描きたいものをどう描けば良いかなど試行錯誤を十分にできないまま、子どもたちは成長して

いくことになる。十分に試せない、どうするとよくなるかわからず、自分で決められない子どもが育ってしまうことになる。よって、スタンプによる版画教材ユニット「いろいろぺったん」を製作した。これを版画につながる造形遊びの教材ユニットとして構成し、発達段階に合わせて用いる教材とした。子どもたちに十分に試行錯誤してもらうことを意図し、様々な教員研修に使用してきた。

これは、図工・美術指導ユニット³のひとつとして平成25年度に製作した。中身はペットボトルのキャップや、短く切ったホース、色々な大きさの紙管、プラスチックの容器など身の回りにあるものに加え、様々な幾何形体や有機的な形、不定形に切った大小様々な木片に子どもたちが捺しやすいように持ち手を付けたスタンプなどから構成されている。筆で絵を描くことが難しい幼児から、小学校低学年頃までを対象とした。こうした題材は教科書に掲載されている。しかし、この題材を版画につながる基礎的な教材として位置づけ、意識的に実践している小学校はほとんどないのではないかと。版画という表現形式に子どもを合わせるのではなく、身に付けさせたい力を育成するために題材を合わせる必要がある。これは、身の回りにあるものに絵の具を付け、紙に捺すことで絵を構想したり、偶然の模様や形などから発想したりする力を育てる題材としている。筆者が特に重要だと思うのは様々な木片を組み合わせて絵を描くことができる上に、違う色や形でやり直すことが容易であることである。試行錯誤により、色や形、構図といった発想や構想につながる要素を自らの思いに従い自己決定する力を育成することができる。版画は何回でも刷り直しの利く題材であり、直接絵を描くよりも試行錯誤をしやすい。こうした版画の可能性をよく理解したうえで、「彫り直す」、「刷り直す」などの時間を確保することが重要である。



図1 教材ユニット「いろいろぺったん」のスタンプ

³ 福井県教育研究所にて平成23年度より当時の研究員 野村由香里により開発され、図画工作科から中学校美術科、高等学校芸術科美術・工芸まで、内容によって体系化した教材システム。ユニットシート（簡易指導案）、項目表、道具ボックスなどから構成されている。



図2 「いろいろぺったん」による作例（牧野）

●発達段階に合わせた題材（中・高学年：木版画）

中学年や高学年の児童にとって下絵制作、転写、彫り、刷りといった複雑な工程をこなし、思い通りの表現を行うことは容易ではない。彫る材料を柔らかいリノリウムなどに変えても複雑な工程は変わらない。作業手順に従った制作に意識が行き、技術面が強調され、子どもたちが発想や構想する場面は限られてしまう。よって、中学年や高学年に関しては、よく行われている木版画の作業をできるだけ簡略化し、子どもたちが表現することに集中しやすい制作方法を考案した。

●木炭による下絵、転写の簡略化

これまでの実践では、画用紙に下絵を描き、カーボン紙などで版木に転写をする。この方法だと子どもたちは、下絵、転写、彫りで同じ絵を3回描くことになる。よって、ここではコピー用紙などつるつるした紙を下描き用紙に使い、画用木炭を使って下絵制作から転写までを短時間でやる。この方法では、木炭に慣れていない子どもたちの下絵は粗くなるが、下絵を作り込まず、彫りの段階で絵作りをすることもねらいとしている。

木炭で描いた下絵を版木に合わせ、裏からパレンでこする。これで転写は完了する。カーボン紙を使う場合に比べ写りも少々曖昧になるが、これも輪郭線にこだわすぎない表現を生むために必要な要素だと考えている。カーボン紙を使い転写する方法の場合、主に転写されるのは輪郭線である。よって子どもたちの意識は輪郭線をどう彫るか、あるいはどう彫り残すかに向かい、輪郭線にこだわった作品が生まれる。高学年になると、立体感を意識する児童も現れるため、輪郭線を意識しすぎず、タッチの幅や長さ、密度などの表情でより豊かな表現が生まれると考える。

また、ぼんやり転写された絵を墨などではっきりさせ、版木全体を黒くする。こうすることで、彫った時の彫り跡は白く目立ち、黒い画用紙に白い色鉛筆で描いているような状況になる。彫りで絵作りをするこの方法では、彫ることは、黒い版木に彫刻刀で絵を描くことだとシンプルに捉えることができると考える。もし、子どもたち

がそうした作業に慣れていない場合は、事前に黒い画用紙に白い色鉛筆で絵を描く学習を行うことで解決できる。

表現の試行錯誤を大切にしたい新しい木版画の方法

1. 画用木炭を使い、下絵制作から転写までの作業を簡略化して行う。
2. 版木を墨などで黒くし、彫り跡が目立つようにして彫る。
3. 彫りの段階でしっかり絵作りをする。
4. 彫り直し、刷り直しの試行錯誤を大切にする。

下絵から転写までの作業

- 手順1) 版木と同じ大きさの紙に木炭で下描きを行う。
 手順2) 木炭で描いた下絵を版木の表面に合わせ、裏からパレンでこすり、版木に下絵を転写する。
 手順3) 版木に写った木炭の下絵をもとに、墨などではっきりさせる。
 手順4) 薄墨などを使って、版木全体を黒くする。

●白黒反転に慣れる事前学習

普段、子どもたちは白い紙に鉛筆などを使って描いている。版画の場合、彫ると白くなるということが理解しにくい。よって、版木を黒くすれば、彫刻刀で彫った跡が白くなり、黒い紙に白で描くことと同じであることが自然に理解される。

また、黒くした版木に児童が楽しく自由に“彫刻刀で絵を描く”ために、黒い紙に白で描く事前学習を行う。これを行うことにより、線の密度が色や表現になる（図3）ことを理解できるようになり、黒くした版木に向かった場合でも、彫刻刀で自在に絵が描けるようになると考える。

白黒反転に慣れる事前学習

1. 白い色鉛筆の線の密度で、色の表現ができることを理解する。
2. 版画を意識し、版木と同じ大きさの紙に、白い色鉛筆で絵を描く。

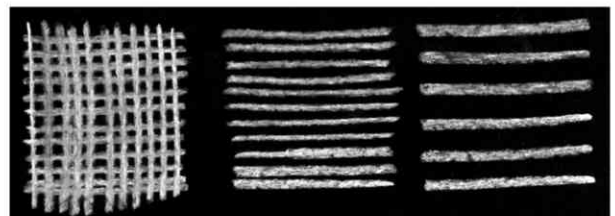


図3

●版画授業のデザイン

これまで福井県教育研究所では、授業改善や教師の指導力向上のために校種別、教科別に研修を行ってきた。平成22年度には筆者（湊）が版画の研修を行った。この

講座は、湊が研究している非毒性版画の技法を学校現場に活かすために実施した。塩化ビニール板やアクリル樹脂系メディウム、金剛砂、ニードルなどを用い、毒性のある薬品などを一切使わない版画技法について研修を行った。受講者の声にもあるように、新しい技法が学校現場に表現の広がりをもたらす可能性を感じさせた。

平成26年度に再度湊が講師を務め研修を行った。ここでは、図画工作科で伝統的に行われている木版画の課題に正面から向き合う必要を感じ、木版画の指導に絞って研修を行った。この研修で、すでに述べた下絵から転写までの作業を簡略化し、彫りで絵作りをする方法を紹介した。

これまで、小学校で行われてきた木版画は、下絵制作、転写、彫り、刷りという過程を経るが、下絵制作や転写を丁寧に行うがために、児童の作業が多くなり、彫る作業を行う時点では2度輪郭線を描いていることになる。また、輪郭線を写す作業を繰り返すため、輪郭線をどう彫るかに意識が集中し、版表現の面白さに意識がいきにくかった。よって、この研究では下絵制作、転写を簡略化し、児童が「彫り」による表現に集中しやすい方法とした。

●刷り工程の充実

製版（下描きと彫り）の過程で予定以上に時間がかかってしまい、良い刷りが一枚仕上がればその時点で刷りが終わりになる場合がある。また、刷りを短時間で終わらせるために一度で完成させようと濃い墨で刷る傾向もみられる。

どんな刷りがよいかについても、児童が何枚も刷った作品を見せ合い、どの刷りがよいかを話し合う活動をすることで、表現に合わせたインクの濃淡や刷りの加減について子どもが自ら判断できるようになる。

4. 教師向けワークショップ

教員向けの研究教材開発は子どもの為だけでなく、版画教材の本質やおもしろさを教師が発見できる魅力も兼ね備えている。大学における技法研究・教材開発の実績と福井県教育研究所における現職教員研修プログラム開発の実績を統合することで、教師教育教材としての発展性にも期待できることが分かった。

本研究では、福井県教育研究所で行っている以下の3つの手法に則って行った。①教員研修講座（実践型集合研修）、②訪問研修講座、③通信型研修講座、である。この3つの研修形態は互いに連携しより効果を上げるものとして設計されている。通信型研修は実践型集合研修のための知識伝達を担い、事前や事後の学習として役立てる。また訪問研修は実践型集合研修を学校現場に機能させ、より実践的に学校を支援するものとして行う。

●教員研修講座

教員向けワークショップの開発にあたり、筆者らはまず参加者らが抱える問題やニーズを的確に捉えようと試み、研修講座に申し込みのあった先生に事前アンケートへの協力を依頼した。

設問は、①版画指導で困難に感じていること、②この講座に期待すること、の2点である。教師それぞれの足下の課題を講座の中で共有し、次の一步をどのように踏み出すことができるのか、指導法の具体例を示しながらワークショップを進める方針を取った。

事前アンケートをとることで、受講者のニーズを的確に把握できるため、より効果的な研修効果に繋げる事が可能となった。

〔事前に受け付けた質問項目〕

- ・版画の題材として、どのようなヒントを児童に投げかけたらよいのか。
- ・版画にするとよいもの（視点）や題材について。
- ・白と黒の割合はどのくらいがよいのか。
- ・版画は2色で表現されるので、なかなか出来上がりのイメージをつかむことが難しい。インクをのせる前に、出来上がりのイメージをつかむために、何かよい方法はないのか。
- ・彫刻刀でどのように彫ると版画にしたときに上手く表現できるか。
- ・木版画で、小学生の場合、何本ぐらいの彫刻刀を使って彫り進めればよいのか。また、彫刻刀を使い分けるときの基準みたいなものはあるのか教えていただきたい。
- ・紙版画の作り方を詳しく知りたい。版を作ってから台紙に貼るのか、台紙に貼ってしまえばよいのか。
- ・紙だけではなく、いろんな材料をつかうと面白い版ができるが、印刷に手間がかかる。その程度を知りたい。
- ・きれいに刷るには、どのようにしたらよいのか。
- ・刷り上った版画を展示するときに、どのような台紙に貼ればよいのか。

指導法についての、具体的な研修内容は次のとおりである。

① 題材設定と作画について：

「子どもの自由な発想を引き出す題材設定とは？」という問いを設定し、「目に見えないものを描く」という題材での制作を試みた。

ここでは、まず4～5名のグループに分かれて、「目に見えないもの」についてグループ毎で10分程度話し合ってもらう。その後、各グループから出た案を板書し共有する。わずか20分に満たない活動だが、個人制作に移る前にこうしたグループ活動を取り入れることで、漠然としていた作品の構想をより

具体化しやすくなる。つまり、人に話すことで自分の考えを明確化しようとする取組みである。

② 製版について：

下描きの転写方法、彫刻刀の使い方、様々な表現の技法を知る。

③ 刷り（印刷）について：

刷り方を変えることで、さまざまなバリエーションが生まれる。基本的な黒インク一色の刷りの他に、異なる色で刷り重ね、刷りのアレンジを広げることで楽しさを倍増させることができる。一つのパターンから全く印象の異なる作品を複数創りだす喜びを体験する。

④ 仕上げと展示について：

ちょっとした心配りで作品に生命を吹き込むことが可能となる。自分で作った作品をより良く見せ、より深く味わえるようにするために、作品を鑑賞する人の気持ちを想像しながら仕上げをする。版画には、画面右下の余白にサインと制作年を書き入れる。画面左下にはエディション（版番号）と呼ばれる番号や記号を書き入れる。例えば5枚存在する内の2番目の作品には2/5とエディションを入れます。サインとエディション番号は、何枚でも複製できる「印刷物」ではなく「芸術作品」であることを意味する。こうした活動をとおして、「作業」ではなく「創作」であることの意味を共有したい。

⑤ 活動の振り返り、鑑賞活動について：

完成作品を読み解き、自分の目で作品を味わう。作品が完成したら、鑑賞するだけでなく作品を評論する。ここでは、物事について、心に感じた事や思った事を述べる「感想」に留まらないようにし、一歩踏み込んだ「評論」となるよう指導する。言語能力で差が出やすい課題でもあるが、評論の方法を理解できれば平易な単語でも論理的に論じる事ができる。（1）作品説明：目に見えるものをそのままの言葉で表現する。（2）解釈・分析：自分なりの解釈を試みる。なぜそう思うのか、なぜそう感じるのか、理由を述べながら批評を加える。こうした活動を重ねる事により、創ること・観ることへの主体性が育まれ、自分の評価基準を獲得する思考的土台やアイデンティティ形成へと繋がる。

⑥ 評価の視点：

版画制作で養われる造形力について検討する。

⑦ 技法の応用：

紙や布、様々な素材の特性を知る。

〔受講者の声〕

- ・「発注型授業」ということが身にしました。子どもの創造のつばさを広げられるような授業をしたいと思います。
- ・版画の刷り方がとてもよくわかりました。今までの

やり方があまりよくなかったことがわかり、今後の版画学習に活かされそうです。

- ・版画の刷り方を初めて教えて頂きました。今まで我流でやっていたので学校に帰って今日教えて頂いたことを広めたいと思います。版本にも紙にも愛情を持って大切に創り出された作品、そのような作品に対する思いを育てていきたいと思いました。
- ・版画のときに使う道具、版画紙の湿らせ方など、目から鱗でした。どんな彫り方をしたら、どう刷れるのかをもう少し研究してみたいと思います。

●通信型研修

小学校図画工作科 版画の基礎

子どもたちが様々な表現を試せる

楽しい木版画の技法



図 4

これは、福井県教育研究所が平成26年度から県内の教職員向けに公開しているインターネットを通じた動画配信による研修プログラム⁴の一つである。毎年、小学校から版画に関する訪問研修の依頼があるため、潜在的なニーズも含めて対応するために作成した。（図4）

学習指導要領や解説での取り扱いから、子どもの発達段階を意識した題材の提案に加え、下絵制作や転写を簡略化し、彫りで絵作りを行う上記の技法について、動画を交えながらわかりやすく解説している。

内容

- 第1章 指導要領での取り扱い
- 第2章 木版画の技法 絵の構想
- 第3章 木版画の技法 転写
- 第4章 木版画の技法 彫り・刷り
- 第5章 鑑賞・まとめ

⁴ 福井県教育研究所 通信型研修

<http://www.fukui-c.ed.jp/~fec/tuusinhp/tuusin.html>

●訪問研修

平成26年度の研修講座で湊が紹介した技法をもとに研修講座のプログラムを作成した。教育研究所の事業として行う訪問研修では、通常1時間半程で行う研修である。短時間とはいえ、多忙な教員にとって貴重な時間であり、ニーズに合わせコンパクトに構成している。内容は、発達段階の理解から木版画の技法までを一通り押さえている。

これまで述べたように、従来型の技法ではなく、新たに開発した技法により基本的な手順を押さえつつも、育成すべき資質や能力に焦点をあて、子どもたちの発想や構想の能力育成に役立つポイントに焦点をあてアレンジしている。

おわりに

美術教育を実践する上で、育成すべき資質や能力を明確にし、子どもの学びや成長を見取るには表現の経験と、表現に対する深い理解が必要である。そして、図画工作や美術を実践する教師は、育成すべき資質や能力に合わせ、題材の本質を損なわずに自在にアレンジする力を持つ必要があるのではないだろうか。

教師自身が子どもの現状を感じ取り、思考・判断し、教材を発想・構想し、授業を創意工夫し、実践として表現することで、子どもたちに豊かな情操が育まれると考える。

本研究で開発した版画教材と3つの手法による教員研修講座は、いずれもまだ発展途上にある。今後は、学校

現場からのフィードバックや授業実践報告の内容に分析を加え、それらの有用性についてさらなる検証を進める必要がある。しかし一方で、教材や指導法は「生き物」であり、それらが完成したかのように思えてもメンテナンスをしない限り形骸化してしまう。

したがって、いかに教材を完成させるかだけでなく、子どもの主体性と創造性を育むことのできる版画授業をどう実現するか、その方法に関して幅広く議論出来る環境づくりの検討も進めたい。

引用・参考文献

- (1) HOWARD Keith (1993), SURVIVING TEACHING PRACTICES in University and College Studio Art Programs: A Guide For Artist Who Want to Become Better Teachers, Fairview College
- (2) 今井治男(1987)、我国の版画教育について、金沢大学教育学部紀要 教育科学編
- (3) 湊 七雄(2012)、PRINTMAKING WORKSHOP TEACHER'S GUIDE 授業に活かせる版画ワークショップ、福井大学教育地域科学部
- (4) 町田市立国際版画美術館編(1991)、版画の技法と表現 改訂版、町田市立国際版画美術館

Research and Development on Systematic Teaching Method of Printmaking Class in Elementary School - Joint study by University of Fukui and Fukui Prefecture Institute of Education -

Shichio MINATO and Hiroyuki MAKINO

Keywords: Printmaking education, arts and crafts, communication type training, teacher training, teacher education

The aim of this study is to realize teaching materials for printmaking class that can nurture school pupils' independence and creativity. The project was carried out as a joint study between Shichio MINATO, University of Fukui, Faculty of Education and Regional Studies, and Hiroyuki MAKINO, Fukui Prefecture Institute of Education.

Based on a principle of easy-to-understand guidance, and aimed at low-grade elementary school children, our woodblock print teaching materials, "Creative Stamping", provide a fun introduction to the basics of woodblock printing. Our materials cultivate our students' own natural talent of artistic expression through the creation of images using various geometrical shapes, large and small, regular and irregular, and also daily household items, which can be made into stamps and then transferred to paper. Moreover, our materials for the fourth to sixth grade pupils, "Enjoying Expression through Woodblock Printing", aim to further develop the skills involved in carving and stamping, using a simplified process of rough sketching.

The materials we have developed benefit not only children, but also have the appeal of sharing, through our processes, the true essence and enjoyment of printmaking. We also hope that our teaching materials can be incorporated into university-level teacher education and research and produce real results in helping current instructors develop better educational processes and programs.